＝特別連載＝

科学技術振興機構『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第469回

九州大学の活動報告

ベンサイダ・カウラ
（九州大学
国際戦略企画室助教）

多文化的視点を醸成
北アフリカ地域との学術交流

２０２５年９月12日から18日にかけて、九州大学国際戦略企画室、農学研究院・芸術工学研究院、立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ）、国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会の協力のもと、モロッコのアル・アハワイン大学（ＡＩＵ）およびチュニジアのメディテレーニアン・スクール・オブ・ビジネス（ＭＳＢ）から学生２名・教員２名を招へいし、学際交流プログラムを実施しました。

GIAHSワークショップ終了後に記念撮影

プログラムスケジュール	
1日目	オリエンテーション
2日目	世界農業遺産 講義
3日目	世界農業遺産 ワークショップ JA糸島産直市場 伊都菜彩訪問
4日目	創造農村デザイン演習
5日目	創造農村デザイン演習
6日目	創造農村デザイン演習 八女中央大茶園訪問
7日目	修了式

■世界農業遺産

９月13日には、九州大学伊都キャンパスにおいて、世界農業遺産（ＧＩＡＨＳ）に関する講義が行われました。講義では、ＧＩＡＨＳの理念や認定基準、国際的な意義について体系的に学ぶとともに、日本・モロッコ・チュニジアの各地域が抱える農業・農村の課題を比較検討しました。参加者は、農業が単なる生産活動にとどまらず、地域の文化、食の伝統、景観、社会構造と密接に関係していることを再認識し、持続可能な農業のあり方やアグリツーリズムの可能性について多角的な視点から理解を深めました。

翌14日には、ＧＩＡＨＳの理念を踏まえたワークショップを実施し、モロッコ・チュニジアの参加者がそれぞれの地域における農業遺産候補地や特産品について発表を行いました。発表を通じて、地域資源の価値や課題を共有し、農業遺産の認定に向けた視点や戦略について活発な意見交換が行われました。

午後には、日本有数の農産物直売所ＪＡ糸島産直市場「伊都菜彩」を訪問し、地域農産物のブランディングや流通の実践例を現地で学びました。参加者は、地域資源の価値を高めるマーケティング手法や消費者との関係構築の重要性について理解を深める機会となりました。

■創造農村デザイン演習

９月15日から17日にかけては、八女市黒木町笠原地区「えがおの森」を拠点に、合宿形式の演習「創造農村デザイン演習」を実施し

ました。参加者は、八女茶山唄や踊りの体験、竹林の剪定、薪割り、食事の準備などを通じて、地域の生活文化に直接触れる機会を得ました。

本演習の印象的な取り組みの一つとして、地域の魅力を「写真・言葉・音声」の三つのメディアを用いて記録・表現するアートプロジェクトが挙げられます。この活動では参加者が自らの感性に基づいて地域の風景や文化的要素を選び、それらを多様な表現手法で記録しました。作品は他の参加学生と共有され、異なる文化的背景を持つ参加者同士が地域の魅力を再解釈し合う貴重な対話の機会となりました。プログラムでは、日本人学生を交えた多文化的な視点からのディスカッションが行われました。参加者は、地域固有の文化や農村資源の継承について、「世界で都市空間の均質化が進む現代社会において、文化の継承は地域のアイデンティティを守るだけでなく、多様性を尊重する社会の基盤となる」「農村の知恵や伝統は、持続可能な未来への指針となり得る」といった意見が寄せられ、それぞれの立場から考察を深めました。

こうした対話を通じて、農村文化の継承は、過去の価値を守るだけでなく、未来に向けて新たな意味を見出していく創造的な取り組みであり、異なる文化的背景を持つ人々が互いに理解を深めるための対話の場でもあることが確認されました。

最終日には、九州大学筑紫キャンパスにてフィードバックセッションと修了式を行いました。参加者からは、日本への留学意欲の高まりや、今後も同様の交流事業が継続されることへの期待が寄せられました。

■今後の展望

11月には、モロッコのＡＩＵを訪問し、今回のプログラムで招へいした学生や教員と再会しました。現地では、日本留学への関心が高まっていることを肌で感じるとともに、招へい学生が日本の大学院（修士課程）への出願を終えたという嬉しい知らせもありました。また、国際室の教員との間で、今後の学術交流や学生交流の可能性について意見交換を行うことができました。さらに、チュニジアのＭＳＢと本プログラムの協力校でもあるＡＰＵの間でも、教員同士で学術交流に関する協議が進んでいます。

本プログラムは、農業・文化・芸術を融合した学際的な取り組みにより、地域資源の継承と国際的な相互理解を促進する貴重な機会となりました。加えて、この取り組みは一過性の交流を超え、持続的な関係構築と相互理解の深化を図る重要なステップであり、今後の国際交流事業への挑戦に向けた確かな基盤となりました。

最後にご支援いただいた科学技術振興機構（ＪＳＴ）「さくらサイエンスプログラム」関係者の皆様、ならびにご協力いただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。

農村資源や文化を継承する意義について議論

創造農村デザイン演習「竹林の剪定作業」

創造農村デザイン演習「八女茶山唄のワークショップ」を終えて